

「日本の宝島」を目指して 地域資源をブラッシュアップ

51地区の個性が醸し出すUSA!?

熊本県西部に位置する天草地方は、有明海（北部）、八代海（東部・南東部）、東シナ海（西部・南西部）に囲まれた天草諸島によって構成されている。今回訪問させていただいた天草市は、そのうちの8つの有人島（天草上島の一部、天草下島、下須島、御所浦島、横浦島、牧島、通詞島、横島）を中心とする都市で、平成18年3月、2市8町（本渡市、牛深市、有明町、御所浦町、倉岳町、栖本町、新和町、五和町、天草町、河浦町）の大型合併により誕生した。現在の人口約8万9000人は熊本県内では熊本市、八代市に次ぐ第3位で、橋で本土とつながれた自治体ではわが国最大の人口規模を誇っている。

また天草市では、合併時の小学校区等の単位である51地区ごとに設置された地区振興会が独自かつ活発なまちづくりを行っている

が注目される。天草市域は天草下島を除けば、おしなべて小さな岬や丘陵地帯などが断続的に続く島嶼部特有の地理的条件下にある。その景観は変化に満ちた美しさを備えている反面、行政区分の在り方も、小学校区や中学校区でシンプルに区分できるフラットな地理的条件を持つ都市とはおのずと違ってくる。小規模集落が多く、地区の数がその分増えるのも致し方ない。

「普通に考えれば、行政区の多さはいろいろな意味でハンディを生じさせる要因になりかねません。合併後の一体化という意味でも得策ではないと思われるかもしれません。しかし、私たちは旧2市8町の合併を実施したときから、行政区が多くなることは織り込み済みでした。むしろ行政区の多さを多様性の象徴とするようなまちづくりをしていくことが、この地で何百年も豊かな歴史・文化を築いてきた先人たちの遺志を継ぐことにもなると考えたのです」

やすだきみひろ
安田公寛
天草市長

そう語るのは安田公寛・天草市長だ。さらにその

ような行政区等を包括した個性的な51の地区振興会がある天草市は、「50の独立した州で構成されるアメリカ合衆国にも似た、51の地区で構成されるユニテッドステーツ・オブ・天草と考えると楽しい。頭文字もUSAですから（笑）」と続ける。

天草市では「日本の宝島」というキャッチフレーズを折に触れ使用している。それは天草全域に伝わるキリシタン文化をはじめとする特色ある歴史・文化、豊かな農産物や海産物などの地域資源を指すとともに、それぞれの





世界三大聖旗の一つ天草四郎陣中旗



日本初の活版印刷機により刊行された天草伊曾保物語

個性を持つ各地区が独自に輝くまちづくりを展開していかうとする、大いなる心意気を示す言葉でもある。

一方では、合併の翌年度（平成19年度）から取り組みを始めた世界遺産登録への運動が、「各地区が心を一つにして、わがまち天草市を考える絶好の機会になっている」という。天草市における世界遺産候補は「天草の崎津集落（国選定重要文化的景観）」だが、長崎県が中心となつて推進する『長崎の教会群とキリスト教関連遺産』の構成資産13件のうち、熊本県から唯一、組み込まれているのが目立つ。

「1549年にフランシスコ・ザビエルが来日して始まった日本のキリスト教文化の中においても、平戸島・島原半島・五島列島・天草などに点在するキリスト教関連遺産は、その初期の流れを現代にまで受け継ぐ一連のものであり、文化庁の見解でも価値を証明するすべてが含まれていることが重要というこ

とでした。それならということ、長崎県・熊本県のご理解もいただいた上で、私たちは積極的に参加させていただくことになったのです」（安田市長）

『長崎の教会群とキリスト教関連遺産』の構成資産13件を有する地域は、キリスト教伝来後にいち早くキリスト教が繁栄した地域だ。そのために徳川幕府成立以後の弾圧もひとときわ激しく、多くの隠れキリシタンを生み出した。現在の崎津教会はかつての弾圧の象徴「絵踏み」が行われた庄屋役宅跡に、昭和9年に神父の強い希望により建設されたものだ。国内でも希少な畳敷きの教会であり、訪れる者を敬虔な気持ちにさせる静謐な雰囲気（せいひつ）に満ちている。また畳に座ってミサを行う形式こそ、まさに西洋と日本との文化の融合を如実に示

全島挙げた魅力ある観光地づくり



福岡空港～天草空港を35分で結ぶ天草エアライン



年間を通じて楽しめるイルカウォッチング（五和地区）



世界遺産候補「天草の崎津集落」の象徴・崎津教会

すものといえるだろう。

『長崎の教会群とキリスト教関連遺産』は昨年8月、文化庁文化審議会の推薦候補に決定した。従来の例では、文化庁の推薦候補はそのままユネスコへの推薦につながるものであったが、今回だけは内閣府有識者会議が推薦していた『明治日本の産業革命遺産 九州・山口と関連地域』との競合となり、残念ながら『長崎の教会群とキリスト教関連遺産』のユネスコへの推薦は見送りととなった。

「予定通りなら最短で平成27年夏にも世界遺産登録の可能性があったのですが、そのようなわけで平成28年の登録を目指す方向に切り替えました」（安田市長）

実際、『長崎の教会群とキリスト教関連遺産』については文化庁の評価はもろろん、諸外国からの評価が非常に高く、世界遺産登録への可能性に曇りはない。天草市の宝の一つ



日本ジオパークに認定された「天草御所浦ジオパーク」

「崎津集落」の文化的価値も改めてクローズアップされた。今後の世界遺産登録運動を通じて、「わがまち天草」への一体感もさらに醸成されていくに違いない。

世界遺産登録運動の推進と並行して、天草市では平成25年度を「おもてなし元年」と位置付けた「天草島民総おもてなし運動」を展開。天草宝島観光協会と連携しながら、天草市で持つ宝（歴史・文化、海・山・里の幸、変化に富んだ自然景観など）を前面に押し出した観光振興策を多角的に実施している。

「おもてなし」の内容は、市民が日常的に路上のゴミを拾う、笑顔での挨拶を励行する、



全国各地に伝わるハイヤ節の源流・牛深ハイヤ（市無形民俗文化財）

観光客が利用する公衆トイレの美化、交通事故対策などによる安心・安全なまちづくりへの参画など、基本中の基本要素ばかりだ。しかし、これを全島（全市民）挙げた運動にすることで、市民にも暮らしやすく、観光客にも快適なまちづくりにつながる効果が期待される。

「平成25年は9月に天草市が熊本県民体育祭の会場の一つになったり、10月に『第33回全国豊かな海づくり大会』の行事が牛深漁港で開催されたり、全国から多くのお客さまが訪れる機会が続ききました。今後は世界遺産登録運動などの影響で観光客が増える可能性もありますし、これを契機に、全島民が参画し



天草に降り立った世界のサンタクロースたち



日本最大の地鶏・天草大王



地域の人の夢を膨らませる芦生柿(加工風景)

て天草を発信しようと呼び掛けたのです」(安田市長)

昨年9月、天草市では「第1回世界サンタクロース会議in天草」というユニークな国際イベントも開催された。世界サンタクロース会議は北欧諸国などで毎年開催される世界的イベントだが、天草でのイベントはアジア唯一の同会議公認サンタクロースとして活躍するパラダイス山元氏からの働き掛けで実現した。そして天草を選んだ理由として、パラダイス山元氏は天草が450年前のキリスト教伝来以後、日本で最も長くクリスマス祝ってきた土地の一つであることを挙げた。この指摘は『長崎の教会群とキリスト教関連遺産』の構成遺産である天草ならではの。日本で最も長くクリスマス祝ってきたという事実も、天草の「新しい宝」に加わったといえる。ところでこのイベントの際、公認サンタク

ロース・山元氏が天草入りするのに使ったのが天草エアライン(AMX)だった。AMXは熊本県、天草市、上天草市、苓北町および民間企業が出資する第三セクターのコミュニティー航空会社だが、昨年2月、天草諸島のシンボルである親子イルカのイラストを全面に配したデザインに塗り替えられ、観光客にも人気が高い。公認サンタクロースはこの親子イルカの描かれたコミュニティーをサンタクロースに付き物の「トナカイが引く空飛ぶソリ」の代わりに使用した。

安田市長は51地区による地域振興のキーワードとして、島内に今ある地域資源に磨きを掛け、本物の宝へと昇華するための「ブラッシュアップ」を挙げた。世界サンタクロース会議の関連イベントを天草で開催する理由も、その際にAMXが果たした役割も、まさにそのブラッシュアップの一環といえるだろう。

地域資源に磨きを掛ける ブランド化事業

天草市が実施している「ブラッシュアップ作戦」は、ほかにもたくさんある。広い意味で農林水産物に関する一連のブランド化事業もその一つだ。例えば日本最大級の地鶏「天草大王」の生産がある。明治中期に中国から輸入されたランシャン種を品種改良してつくられた天草大王は、昭和初期にいったん絶滅したが、アメリカからランシャン種を再び輸入し、軍鶏や熊本コーチンなどと7世代掛けて選抜淘汰を繰り返して、平成12年に復元。現在は市内6カ所の農場でじっくり生産されている。

復活がある一方で新種の取り組みとして、手野地区のまちづくり振興会が実施している芦生柿(渋柿)の特産品化・ブランド化が面白



地域振興に存在感を発揮しはじめたオリーブ事業

ブーム」に沸く欧米からも注目されており、天然物重視の国内よりも今後、欧米への販路開拓が見込まれるとところだ（養殖クロマグロは3年物から出荷される）。これらの事例はいずれも、単なるブランド化のみならず、生産・加工・販売までの一切を手掛けるという意味で、まさに六次産業化の典型的な事例といえる。

「JAを主体に既に高級ブランド化が実現しているデコボンなども、JAの協力が得られれば、今後は端物を使ってジャムに加工するなど、六次産業化に向けた展開が期待されます」（安田市長）

い。20年ほど前に、同地区に1つで650gにもなる大きな実を付ける柿の木が突然現れた。この巨大な柿の実を干してみると、色鮮やかなままで糖度が非常に高い干し柿ができた。これを高級品として売り出すことを考え、住民の生産グループを立ち上げ、1本から接ぎ木により約700本が収穫可能な状況になった。生産と同時に商談会等へ参加する中、東京の大手百貨店などが興味を示し、高級な商品にもなる可能性が出てきた。

地域ブランドの概念からは外れるが、3年前から市内で進む養殖クロマグロの生産も面白い。その品質の高さは「スシブーム」「和食

六次産業化を基本とする天草ブランド創出の事例はまだたくさんあるが、ぜひともご紹介したいのが「オリーブの島づくり事業」だ。これは天草市オリーブ振興協議会が主体となり民間企業や農家などと連携し、市内の農場や柑橘系の廃農園および耕作放棄地への植栽を行い、苔明高校や苔洋高校の生徒たちによる加工品開発協力など、多角的な連携によって運営されている事業だ。地場産品創出だけでなく、九電工が直営するオリーブ園は新たな観光資源として、地域連携によるまちづくり事業の一環として、さらにオリーブオイルの普及による市民の健康増進への寄与など、多角的効果が期待されている。

将来的には農家の新たな収入源としても期待され、新たな地域の雇用場としての機能も発揮し始めている。その中でも九電工のオ



「天草大陶磁器展」の開催風景（毎年11月開催）

「二地域就労という新たな就労スタイル」

リープ園で働く社員が、九電工の福岡勤務社員の出向という事実だ。この二つの地域で就労するというスタイルが、天草市が進める「二地域就労促進事業」のヒントとなっている。

天草市における「二地域就労促進事業」（京都大学経営管理大学院との連携事業）は平成23年度から始まった。新たな企業誘致などがさまざまな要因で難しい中、つくられた新しい就労スタイルの事例である。大都市や他地

天草市

市 政 ル ポ

(熊本県)



二地域就労の事例・ベビーリーフの農場

域で勤め、あるいは暮らしながらも、天草地域と関わり合い、天草地域と一緒に、地域に仕事や生業を生み出していく営みのこと。一言でいえば、市外企業のメリットと市内企業・団体の課題解決を互いに満たすため、市外企業と市内企業・団体が協定を締結し、派遣された市外企業の社員が地域に入り込んで、そのための具体的プロジェクトを推進するものである。

その典型的な事例となっているのが、自動車部品会社の農業参入である。リーマンショックの際に大量の首切りをしなければならなかった苦い経験を生かし、本業が不振に



二地域就労で天草市に赴任した全日空社員による職業講話

なったときの安全弁としてベビーリーフの栽培農園を天草市内に設立。さらに付加価値をつけるため、休耕田を活用し米の裏作としてグラウンドリーフの試験栽培を実施した。新たな事業開拓による企業体質の強化も図れ、この農園は発足3年目となり、年々売り上げを伸ばしている。また農園に指導員として入っている社員は別企業の社員で、その社員にとって『二地域就労』となっている。

天草市自体にも、現在、社員の人材育成や航空産業の活性化の目的で賛同した全日空から2人の社員が産業振興と観光振興のセクションに向向している。営業管理職の男性社

員は天草産品の販路開拓や観光商品開発に腕をふるい、国際線CAを務めていた女性は「おもてなし教室」の講師など、やはり自らのキャリアを生かしながら、伸び伸び働いている。天草市にとっても、産業振興や観光振興の新しいノウハウを吸収でき、ウインウインの関係が成立している。

「新たな企業誘致が難しければ、人材の誘致はどうだろうか、という発想で始めた」(安田市長)とのだが、この二地域就労の事例は、全国自治体の参考事例としても非常に優れている。

このように日本の宝島を目指す天草市の諸事業は、多角的アプローチが結果的に皆、地域資源のブラッシュアップや地域課題の解決へとベクトルを向けている。今あるモノを大切にしたいという軸が、すべての事業に通底しているからだろう。

(取材・文 遠藤 隆／取材日平成25年11月21日)



天草四郎像